
Rivica

黒蜜蜂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R i v i c a

【Nコード】

N 5 9 3 7 S

【作者名】

黒蜜蜂

【あらすじ】

及川 サクラ。不運の事故に巻き込まれ、生死を彷徨うことになる。そこで彼女は不思議な夢を見る。

第0話 私の終わり

死はいつ、何時になつて訪れるか分からない。

それは春、桜が咲き始めた頃だった。

私は友達との待ち合わせの途中、大型のトラックに轢かれた。運転手は居眠り運転していて、気がついたときには私を跳ね飛ばし、近くの塀へと激突した。テレビやニュースでたまにこういうことがやるけど、まさか自分自身に襲い掛かるとは思ってもいなかった。

私の全身は痛みに襲われていた。骨が数箇所複雑骨折しているということだった。意識が朦朧としている中、母と父と弟が私の名を呼びかける。　　サクラ。サクラと。

ただ、その問いかけも虚しく、私の意識は目を閉じる。そして、私は小さな夢を見るのであった。

第0話 私の終わり（後書き）

ということ、プロローグです。ファンタジックな世界観出せたらいいのぉ・・・

第1話 夢の始まり

私は今、階段を上がっている。

辺りは真っ黒でただ一筋に伸びる階段を私は自分の足で上がっている。階段は音を立ててどんと崩れ去っていく。私はそれに追いつかれないように必死に必死に上へ上がった。

階段の終わりには小さなドアがあった。立てかけられた小さな看板には『R i v i c a』と書かれていた。その意味は私には分からなかったが、私の行く先はその扉の向こう側しかなかった。他に道もない。私は恐る恐るその扉を開いた。

すると、そこには空があった。無限に広がる青い空。そして、雲の中に私はいる。

「飛び降りろ！」

その声がどこから聞こえた。私はその声に従って、青い空の中、飛んだ。

私は物理法則に従って、垂直に落下していく。重力がのしかかり、加速度を上げて私は一気に落下していく。すると、小さな光が現れ、私を包み込んだ。それは暖かく優しい光でどこことなく懐かしかった。スピードは徐々に落ちていき、やがて地面へと私を落とした。

「お久しぶり」

その声の先には一人の少年がいた。青い汚れたジーンズ。黒いTシャツ。そして、少し黒のかかった茶髪は長く目元が隠れている。ただ鼻の形、口の形を見ると非常に端正な面持ちであるのは分かった。

「私は死んじゃったんだよね？」

と、私はその少年に尋ねた。少年はするとにこりと笑いながら答

えた。

「君はまだ生きているよ、微かながらね。ただあんまり時間はない。君がここに来るのはまだ早過ぎる。僕が出口まで案内するから着いてきて」

私は辺りを見回した。そこは木々が穏やかに生えており、川が流れ、花が咲いている。それは自分が死んだ後に想像していた景色とは思えないほどの綺麗な光景がそこにはあった。

「ここはレムの森。僕達が目指すのはあそのこの回廊さ」

少年が指差す先にはまっすぐに伸びた塔があった。少し遠い場所にそれはあった。

「あそのこの回廊で君がああ青く光る星に手を伸ばせば、君はまた君が生きていた場所に帰れる。さあ、手遅れにならない内に行こう」
少年が私の手を引っ張る。そして、私達は森の中に行く。

私は少年の名前を尋ねた。少年はその返事に僕は生まれてこの方、名前がない。と答えた。そして、藪を掻き分けながら僕に名前をつけてよ。と言った。私は少年の名前をどうしようか考えた。そこで一本の木を見つけて私はひらめいたように言った。ウッドと。

ウッドと呼ばれた少年は微かに笑いながら、木って、単純な名前だな。と私を小馬鹿にした。

「もつと、かつこいい名前にしてくれないか？ 折角なんだし」
そう付け加えるように少年は答えた。私は少々不機嫌になったが、また新たに名前を考えようとした。草、花、川。どれを取ってもぱつとしなかった。少年はまだ思いつかないのかというような顔で私を見た。すると、

ガタガタ……。

と、地面が揺れた。その時に少年の雰囲気は前とは変わった。
「よし、僕の名前はウッドで行こう。サクラ、今から少し走る」

ウツドはそういうと痛い位に私の手を握り、森の中を駆け抜けた。後ろを振り向くと黒い影のような塊が追って来ている。

「ねえ、あれは何!？」

「君をさらに来たんだ、死の世界へとね」

それは不気味な赤い目をしており、明らかに死の使いを彷彿させる。私達は追いつかれないように必死で逃げる。その黒い化け物はあらゆるモノを飲み込んでいき、森を荒らしていく。闇雲に前へと駆け抜けていくと、そこは崖だった。

「ど、どうするの? ウツド!」

「決まってる、飛び降りるんだ」

そうすると、ウツドは私を抱きかかえ、崖を飛び降りた。すると、またあの暖かい光が私達を包み込み、そっと地面へと降ろした。

「はあはあ、もう追って来ないよね?」

私がウツドから手を放した瞬間だった。その黒い魔物は油断した私の手首を縛りつける! そして、私を飲み込もうとする!

「バカ! 手を放すな!」

ウツドは右手から今度は剣のようなモノを作り出して、その魔物の触手のようなモノを斬った! 私はそれと同時に地面へと叩きつけられた。

「行くぞ! こいつらは死なない。地の果てまで追ってくるぞ!」

そう言つて、ウツドは私の手をすぐさまに掴み、茂みの中を駆け抜けた。魔物は私達が逃げるのすぐさまに察知し、また追ってくる。

「これじゃあ、きりがないわよ、ウツド!」

「こいつを振り切るしか道はない、走れ!」

私はウツドに言われるがままに走った。しかし、魔物はジリジリと距離を詰めて、私達に近づいてくる。そこに流れの強い川があった。

「しめた! 水の中に飛び込むぞ、しっかりと息を吸い込め!」

私はわけの分からないまま、水の中に入った。そして、私とウツドは川の流れに沿って、流されていった。

第1話 夢の始まり（後書き）

言葉の選びが単純かと思ってしまう今日の頃。 O T L

第2話 夢の途中

「おい、目を覚ませ、サクラ」

私は頬を叩かれている。この声はウッドだ。

「なんとか上手く撒いたらしい」

「そうなんだ」

私は安堵の息をこぼして言った。

「まだ星の回廊まで距離がある、油断は禁物だ」

「さっきのヤツって死神？」

「まあ、そんなところさ」

ウッドは立ち上がり、再び私に行こうと言った。

「ウッドはどうして私を助けてくれるの？」

いささかこのことが不思議でしうがなかった。何故、ウッドが私の味方なのか、さっぱり分からないのだから。ウッドは口開く。

「君がもしこちらに生まれていれば、僕があちらで生まれていた」

「どういうこと？」

「分かりやすく言うと、現実の世界は君が管理して、精神的な世界は僕が管理するって感じかな」

その返答に対して、私はさっぱり分からないと言ってあげた。ウッドは訝しげにこうまた話す。

「君は女の子として生まれてきただろ？　じゃあ、もう一人はどこに行ったって話さ。僕は君の分身みたいなもんだよ。君は何も覚えてないだろうけどさ」

と、ウッドは言った。それでも話が分からない私は頷くフリをした。

「まあいい、レムの森を抜けたよ」

辺りを見回すとそこにはキノコが沢山生えていた。後、妙にべとついて大気が湿っている。

「ここはキノコの湿原さ。まあとにかく先を急ごう」

しばらく先に進むと巨大なキノコが沢山生えている。人を乗ることが出来る位の物凄い大きさのキノコである。私達はキノコからキノコへと渡り歩いた。しかし、しばらくすると、辺りから奇怪な音がした。

「奴等が来た、走るぞ！」

不安定な足場であるキノコの上を私達は走った。私が振り向くと黒い魔物が何体もいた。軽く数えるだけで10体以上はいる。

「一体、何体いるの？」

「幾らでもいるよ、君を死の世界に連れて行くまでね」

すると、黒い魔物はキノコに衝突したのだ！私はそれに足を取られ、キノコの上から落下してしまった！

「サクラ！」

そう言うのと、ウッドは私の方に手をかざした。そして、あの暖かい光を使おうとするが、黒い魔物達に妨害されてしまう。そして、黒い魔物は落下する私の足を掴み、そのまま体内に放りこもうとする。

魔物の体内に近づくにつれて、色々な声が聞こえてきた。

悲痛。叫び。嘲笑。

私はその先に行くのがとても怖くなり、泣き叫んだ。そこでウッドは右手に槍を作り、私を掴んでいる触手に向かって放り投げた！槍は触手を貫通し、切り裂いた。だが、私は足場がないため、そのまま深い谷底へと落下していく！

目を覚ますと、私はキノコの上にいた。キノコがクッションの代わりになり何とか助かったようだった。

「無事で良かった」

と、ウッドは私を抱きしめながら言った。

「ちよつと、暑いってば」

「ごめん」

と、ウッドはその腕を振り解いた。私の頬は妙にそのせいか火照ってしまった。

「そ、そういえば、魔物は？」

「一応、火で焼き切ったけどどうかな？ 10分もしない内に追ってくるはず」

「じゃあ、逃げなきゃ」

「そうだな、ゆっくりと降りていこう」

光に包まれながら私達は下へと降りていく。やがて、地面が見え、そこに私達は足を着ける。

「さあ、こつちだ、進もう」

「ウッド、そっちで合ってるの？」

「合ってるよ、さあ、行こう」

私はウッドの差し伸べた手を掴み、再び前へと進んだ。

数分後、魔物達がまた背後から追ってきた。ウッドはそれを何度も何度も焼き払いながら、上へと上っていき、そして私達はキノコの湿原を抜けた。

「星の回廊までもうすぐだ、後はこの蜃気楼の街を抜ければね」

私達は二人、手を繋いでその街へと駆け出していく。

第2話 夢の途中（後書き）

見切り発車の危険性を垣間見た（笑）
そして、物語は終盤へw

第3話 夢の終わり

屋気楼の街へと私達は入った。

その街は西洋風に作られ、まるでベネチアを描いたような街であった。しかし、辺りは霧で立ち込められていて視界がよく見えない。ウッドは再三、注意するように私にこう言った。

「絶対に手を離すな、オレがサクラを見失ったら最後だ」

私は深く頷いた。すると、またどこからともなく奇声が聞こえた。さて、また出てきたな、走るぞ！ サクラ」

私はウッドの手だけを頼りに前へと進んだ。

街の階段の上がったり下がったりでちつとも前に進んでいる気がしなかった。

「ウッド、本当にあつてるの？」

「サクラはオレを信じてればいい」

続けて、ウッドの声が聞こえた。

「サクラ、手を離せ！」

私は思わずその言葉の言うとおりに手を離してしまった。

「バカ！ 畏だ！」

またウッドの声が聞こえた。ウッドがどこにいるのか全く分からない。どれがウッドの声か分からない。

「……ツカマエタ」

何やら不気味な声と共に私は黒い魔物に引きずりこまれる！

「サア、クルンダ！ コッチニサア！」

黒い魔物にひきずりこまれると共に、色々な声が聞こえてくる。

「オマエハシンダンダ！」

「オトナシクコチラヘクルンダ！」

そこへ槍が飛んできて、魔物の触手を切り裂く！ ウッドだ！
「いいか、サクラ！ 今の位置からまっすぐに走れ！ そして一気

に回廊を登るんだ！」

「え、ウッドは着いてきてくれないの!？」

「後はお前の力で何とかするんだ！ 走れ！ オレはこいつらを食い止める！」

「それって、嘘なの!？ 本当なの？」

「いいから走れ！ 絶対に諦めるな！ オレはウッドだ！」

私はその声に従って、走った。走るしかなかった。

走っても、走っても、星の回廊には着かない。もしかして、また黒い魔物の囁きだったの？ でも、私はその言葉を信じるしかなかった。

走りついたその先には、回廊があった。どうやら、あの声はウッドだったようだ。しかし、黒い魔物が無数、私の目の前に現れた。私はウッドの言葉を思い出した、絶対に諦めるな！ と。私はその言葉を胸に秘め、回廊を駆け上がっていく。

回廊を破壊しながら、黒い魔物は私に近づいてくる。それでも私は後ろ振り向かず走り続けた。時折する爆発音から、ウッドが近くで頑張っているはずだと信じた。

回廊の終わりまで何とか辿り着く。頭上を見上げれば青い星が煌々と輝いている。

「ニガサンゾ！……！」

ここで手を星にかざせば私は死なないんだ。私は青い星に手をかざした。すると、そこには朝の光が見えた。そして、その光は私を覆いつくすように意識を消していった。

目覚めると、病室の天井が見えた。どうやら、私は一命を取り留めたらしい。

「サクラ！」

そこには付きっきりでいてくれた母がいた。

「あたし、生きてるんだ、良かった」

母と父がその姿を見て、泣きじゃくった。それも無理もなかった。私はあの夢を見ている最中、3ヶ月も眠り続けていたのだから。

私はそれから3ヶ月して、何とか退院することができた。そして、父はある日、不思議なことを言った。

「そういえば、この病室の近くに桜の木があったよな？ あれの枝が突然ぽつきり折れたんだよ、風もないのに」

「え？」

「今、考えても不思議でさ、何だろう？ まあ、枝は折れてもまた生えてくるからなあ、しかし、あれは何だっただろう？ 不思議だ」

私は笑顔で答えた。

「もしかしたら、もう一人の私かもしれない」

「そんなことあるか」

「だよな」

ありがとう、ウッド。私はあなたのことを覚えているからね。

第3話 夢の終わり（後書き）

三文小説以下になった感が否めず（＝
＝；
メッセージ性とかまるでないから薄っぺらい印象。
まあ、とりあえず完結です、ここまでお付き合いして頂いた方あり
がとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5937s/>

Rivica

2011年4月20日01時55分発行